
DIC E

Hank.Wott

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I ☿ E

【Nコード】

N 4 3 6 9 S

【作者名】

H a n k . W o t t

【あらすじ】

護りたいものを護るための力が、護るべきものを壊してしまう、矛盾。

たった二人きり、血に塗れた『死神』の追想。

#01 (前書き)

『グロ注意』です。

血の海。

そう称することさえ憚られるような惨状が広がっていた。

質感さえ感じられるような濃厚な血臭と、死体になりきれなかった肢体たちの呻く声。不協和音の渦巻く最中に喘ぐような呼吸音が、追うべき旋律を見失ったかのように不安定に響く。

俺は、最悪の場合を警戒して水平保持していた短機関銃サブマシンガンの銃身を下げ、目の前、ちょうど入り口のところで立ち尽くす相棒に目を遣った。自慢の髪は血を浴び過ぎて、どれがエクステなんだか分かりもしない。足元には撃ち尽くして空になった無数の弾倉マガジンと、同じく短機関銃が無造作に打ち棄てられている。サングラスの片目は乾き掛けた血糊がべっとりとかびり付いていて、視界は良好とは言えなさそうだ。

その相棒が右手にバタフライナイフを、左手は空間を握り締めて、血の海の淵に立っている。

玄関ホールの夜間警備隊を俺が。昼夜問わず開発研究に明け暮れているであろう研究員とその研究データを相棒が。初めからその手筈であり、実際、その指示通りに襲撃は実行された。あとは死に切れないでいる研究員連中に、相棒がトドメを刺しさえすれば。

社長の命令通りに一連の計画は完了する。

相棒が、ゆっくりとナイフを振り上げる。かたちのいい口許は薄っすらと笑みを浮かべてさえいる。その恍惚とした表情は殺伐とした感情に溺れ切って、ある種の狂気に酔い痴れているようにも見えた。わざわざ他人の殺人現場を目撃しようというのも無粋な趣味なので、計画進行に支障無しと認めた時点で俺はさっさと逃走経路ルートの確保に

向かうつもりだった。履き潰したブーツの爪先が、見慣れたデザインのダイスを蹴り飛ばすまでは。

「…東雲の」

それは常日頃から相棒が手慰みに持ち歩いているダイスなのだが。それがどうして襲撃現場こんどころに落ちているのか。理由など見当もつかないが、何にせよ襲撃者を特定されるような残留物は避けるべきだ。そう結論付けて、血溜まりに沈んだダイスを拾い上げる。それは意外にもずしりと重かった。

「普通のダイス、とは違うのか」

見た目にはアクリル製の、一言で形容するなら「チャチな」ダイスなのだ。蛍光灯に透かすように摘み上げて、そこで俺はそのダイスがまともじゃないことを思い知らされる。

「目が、七つだと…？」

『四』の目が出たら、逃げて。『七』の目が出たら、死んでも逃げて。

あの時、何事にも物怖じしない主義の相棒が、珍しく怯えたような表情をしていたのは…

#01 (後書き)

今回はだいたい細切れです。
さつくと読みたい、そんな貴方に最適!!

#02

振り下ろされたナイフの刃が肉を引き裂いて、柄^{つか}まで一息に押し込んだところで止まった。辛うじて眼球を潰^やられるのだけは回避した俺は、相棒が刃を引くより先に、掌に深々と突き刺さったナイフごと握り締めて、腕を払った。

振り解かれた相棒の右手指が、彷徨うように空間に爪を立てる。俺の手を貫いて甲まで突き出したナイフの赤い切っ先を、忌々しげに睨みつけていた。

「返して」

右手を差し出して、早急にと要求する。相棒の瞳は何処となく虚ろだ。俺は咄嗟にナイフを受けた手を背後に庇った。

「返してくれないなら、取り返すだけだよ」

今の相棒なら、きっと、躊躇いなく俺を殺してしまうのだろう。そう考えただけで背筋がぞつとした。恐怖ではなく、歓喜で。

「残念だが、このナイフは俺のものだ」

「ボクのだよ。西木戸くんの嘔吐き」

「嘘じゃない」

「嘘」

「嘘じゃないって」

笑いながら、空いたもう片手を背後に回して、その手がナイフを引き抜いた。

「だって、お前のナイフは、」

もう、此処に“居る”だろ？

#03

「人体実験に志願？お前が？」

相棒がそんなことを言い出したのは、ちょうど一ヶ月前。

「だって、今のボクじゃどうやったって、西木戸くんの足手纏いだよ？」

極秘の襲撃任務を社長から仰せ付かった日の午後だった。

「仕方ないだろう。そもそも身体づくりが違うんだから」

自慢ではないが、防衛部内のランキングでダントツ一位をキープし続けている俺に、いくら相棒といえども、拮抗しようということ事態が不毛なことなのだ。

「仕方ない、じゃ済まないよ。今度の任務は二人きりなんだから、ボクが西木戸くんを護らなきゃいけないんだから」

「あんな、俺はもうそんな貧弱じゃないって…」

幼い頃、人一倍泣き虫で小柄だった俺を、相棒はいつだって強大な周囲から庇護してくれたものだ。それはまるで一種の母性本能のよう。さすがに今では俺の方が明らかに強いし、背だって高くなっただが、相棒の母性本能には更に磨きが掛かっているように思う。

「ダメ。ボクは一生西木戸くんを護るって決めたんだから」

「でも、なあ、東雲。そろそろ俺にだってちよつとは格好付けさせて、」

「却下！！」

却下するなよ。俺にだってたまには格好付けさせろよ。

お前を護りたいって、折角ここまで強くなったんだからさ。

「とにかく、ボクは絶対に西木戸くんより強くなって見せるんだからね」

「はいはい。期待して待ってるよ」

俺の気も知らないで。

それが、自らの運命を大きく歪めてしまっても知らないで。

相棒は禁忌の技術に手を伸ばした。

#04

―AZ社社長室。

殺戮衝動のコントロール。

麗園寺くんからはそう、説明を受けていた。ボクの潜在的身体能力を持ってすれば西木戸くんに敵うことも不可能ではないと、そうも言われた。

「人間は、無意識の内に自分の能力に制限を掛^{リミッター}けている。それは勿論、そうするのが自分の身体にとって、または日常生活を送ることにおいて何かと都合がいいからだが、お前の場合は必ずしもそれだけじゃない。本当は出来るのに、躊躇っている。本当は相手を殺せるだけの力も、度胸もあるのに、その原動となる衝動を執拗に押し込めてしまっているんだ」

麗園寺くんとは長い付き合いだ。だからボクは彼を信用していない。彼が信用に値しない人間であるということは、その巧みな弁舌、結果のためには手段を選ばない性格、明晰すぎる頭脳、そのどれをとっても明らかだ。しかし、

「それならどうすればいいか。その必要以上に掛けられた制限を外してやればいいのさ。…このダイスは、お前の殺戮衝動と同調している。理性の制限を無視してしまえるようなレベルでね。つまり、このダイスの値を大きくすればするほど、お前の内から強大な殺戮衝動を引きずり出すことが出来るというわけだ」

彼の実験、研究、生み出された兵器、その手に育まれた全てが、神でさえも凌駕し陵辱するほどの結果を伴っていることもまた事実なのだった。

「ダイスの目を変えるのはお前自身ではない。血だ。このダイスは

血を吸うと、その量を数値に反映する。それが目として示されるわけだ」

話が長い。これはいつものことだが、今回ばかりは口を挟みもせず真面目に聞いている。

「一応、ダイスらしく目の上限は『六』となっているが、殺戮衝動に影響を与え始めるのは『四』からだ。そして、『六』という上限を振り切ってダイスが血を浴びた場合、『七』という目が現れる。これの意味するところはエラー、要するに、『暴走』だ」

暴走、という言葉がボクに刺さる。暴走を起こす、ということは、見境のない殺戮衝動に身を委ねてしまう、ということだ。敵と味方の区別など、悠長にやっていたいられるはずもない。そうなれば、きっとボクは、

「もしも暴走を起こしてしまったら、ボクが、西木戸くんを殺してしまふということは……」

「有り得るな」

西木戸くんを、^{コロ}＊＊してしまう。

護りたいものを護るために手に入れた力で、護るべきものを壊してしまう。矛盾した存在。

なんて皮肉な。なんて残酷な。

しかし、それが兵器と名付けられたものの負うべき運命なのだ。

「くれぐれも、『七』の目は出さないことだ。わかったな、東雲」
ボクの戸惑いなど余所に、麗園寺くんはさっさと別の仕事に取り掛かってしまう。

実際、麗園寺くんには何の感慨もないのだ。自分の作り出した兵器が何を生み、誰を護り、誰を殺したかなんて。彼は自らが生み出した全てを同等に、我が子として愛しているのだから。その子供たちが『生』を全うすることに、何一つ憂う必要などない。

「わかり、ました」

右手に手渡されたダイスを握り締めたまま、ボクは了承した。
血のように赤い色をした“ボクの殺戮衝動”は、今は未だ静かに『
一』の値を示していた。

「……殺してくれ……コロして……痛い、嫌だ、早く……殺し……」

最後の一人の喉を切り裂いてやって、俺は血で刃が駄目になったナイフを元のように折り畳んだ。

相棒は、俺の拳を鳩尾に食らって気を失っている。その手の中では今も未だ、あのダイスが不吉な数字を浮かべていた。

「東雲……」

やっぱり、お前に人殺しは似合わないんだよ。

抹殺対象を半殺し……否、瀕死にしたところまでは、相棒の意志だったに違いない。相棒は、決して弱いわけではないのだ。戦闘訓練、生け捕り任務、そういったものにはめっぽう強い。ただ、人を殺めるという、その一線を越えることが出来ないだけで。

「お前は、人を殺すための兵器じゃない。誰も殺さなくていいんだ」俺が、お前の刃になってやるから。お前の代わりに、全部の血を浴びてやるから。

「……そのために、俺は強くなったんだからさ」

動かない相棒を担ぎ上げて、逃走経路としてあらかじめ打ち合わせであった非常口へと。外に出ると無味無臭の風が吹き付けて、いかに室内が血に塗れていたかを実感する。腰にベルトで吊られた無線機を片手で取り上げて、俺は社長に通信を繋いだ。

「こちら『死神』。襲撃任務は完遂しました。ただ今より帰還します」

死神―それが俺と相棒とに与えられた通称。

その暗躍は未だ始まったばかりだが、いずれ、この街の大いなる脅威となるだろう。

何故かって？

理由なんてない。ただ、麗園寺社長の生み出すものはいつだってそうと、相場が決まっているのだ。

ふと、疲労を感じた。普段ならこの程度の労働、何てことはないが、さすがに今日は殺し過ぎたようだ。

「戻るか」

路地の片隅に、人目を憚るように停められた黒塗りのワゴン。後部座席に丁重に東雲を放り込んで、自分は運転席に回る。

「まずは一社……。残るはあと、六社か」

裏で政府と手を組んで、大規模な兵器開発を行っていた七大企業。その内の一社が謎の襲撃者によって一夜の内に壊滅したのを皮切りに、次々と襲撃事件が彼らを襲った。

襲撃に居合わせた社員は一人残らず殺害され、目撃情報も皆無。彼らは襲い来る圧倒的暴力を甘受し、沈黙せざるを得なかった。そうしてこの街の軍事市場は一気に収束するかに見えた。

そんなとき、一つの弱小組織が突如、街中の話題を攫った。

AZ社。

社長を名乗るのは異能の技術者・麗園寺。他社とは桁違いの殺傷能力を誇る兵器を生み出し、秘密裏に組織された私軍は、政府軍と武力で拮抗する。

当然、幾つも不穏な噂は立った。数え切れない非難もあった。襲撃事件の下手人はAZ社ではないのか、と正義感を盾に演説ぶるコメントーターさえ居た。

しかし、結局のところ誰も知らなかったのだ。

襲撃の本当の下手人。かつて麗園寺の下、『死神』と呼ばび習わされた存在を。

「西木戸くん」

「何だよ、にやにやして……。不気味だぞ、東雲」

「んー？別にー。何でもなーい」

たった二人。

護り合い、汚れ合った、二人。

「『珍獣屋』に、季節限定パフェでも食いにいくか？」

「さんせいー！！勿論、西木戸くんの奢りだよね？」

「またかよ。お前、この前も大盛りオムライス俺に奢らせ、」

「そんな昔のこと覚えてませーん、だ」

「ったく…仕方のない奴」

空は快晴。風は南西。

俺を掴もうと伸ばされた相棒の手から赤いダイスがこぼれて、乾いた音を立てる。

『一』

「ほら、ぼけーっとしない」

自然な動作で拾い上げて、何事もなかったかのように笑う。

願わくば、この笑顔が永久に汚されないことを―。

#06 (後書き)

西木戸&東雲コンビが大好きです↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369s/>

DI ☒ E

2011年10月7日15時46分発行